測量學理

特43
915

特43
915

田子丹宮著述

神宮敬會早多與理

明治十三年五月出
版權免許

樟歌堂藏

凡例

早便

心迦赤

伊呂波宇多

神貴身の恩

志米ん之巻

早便

いろは歌

いのちつぐ命をすすぐ

神乃恵まことにかへ

罪

ゆ清みあらみ

ろ

ろんいとまる永日の業神の心
神祭あり禮の本を尋ね

は

花を見る時を選へば神佛
道を背の外へ出で

に

にちくの勤を怠る勿れなが
神と君との恵みこそ嬉

ほ

ほの道を迷ひて歩む大道を
神の出るべの宮守れて

へ 屋うちだくの所西を東とし
分を守るしるし神もまもらん

と ともすれば傷る心の子孫を
神の御心まもるすべ

ち 子孫よすべて礼とは盡すべし
神は非禮を享なまず

り 利と欲に心迷ひ神を立
浮世の川に測られたまよ

ぬ

ぬだたのやうに金を取りすて
神祈りても何の益なし

る

瑠璃の玉ばこ百首歌を尽
神と君とをまもるときとしれ

を

嗚呼がましい八十のよはひなる人のそれ
真ひとつの神の法をしへ

わ

我胸の岩戸開けて天照を
神乃国へ明らかにして

か

金ほしゝ外ハ名理なる商人を
神の咎とかめ斗祭こ於あ紙

よ

善よつゝ悪きハ付て一心ハ
神の恵めぐみと祈ル人〻

た

たゞ身ハ病気ハ災難有ハ
迯るやうハ神を祈れよ

れ

ゐ労もゝ工夫を為て神ハ業
磯石電信石思儀なるぞや

そ 夫見てもこれを見る神の思
ふくう 道を あやまだに ゆえ

つ 勤めても又勤めても勤めて
乃ち いと 勤め日の神を見よ

ね 祈ぎ事の誠は天神もうと
無理の所ひ叶ハざる所

な 何事もなくて目出度今日ハ
神と君との恩恵やしれ

ら 懶惰もの何ぞ神を祈りても
驚しなきを出を過しなりと雖

む 言しよ祝神を背ける悪者の
終は忍料より驚ち入家を乞よ

う 浮箒をハ神人に媚なり
すべて物事怨みせよ

ゐ 遠き変を神を頼よ安ハ等ゆ
高天ハ原の大乃しミを受く

の

能あれど己が自慢をするのハ
神も疎まれ人も遠ざく

お

おごるなよ満れハ闕る月盛
うつる盛りを神やえらん

く

くややすこぎ屋ハて家業勵なハ
神も恵こて楽か身となる

や

やハ百よ海つをの元ハ有なゝ
神ハ伝いる元ハ赤ミち

き

佐奈良と性りて惰めよ
神々召とハみ給ふ

まも

け

怠なく知と起て働のハ
神も恵みて安寧繁昌

ふ

富貴なる貧困なる人の
神は唯者の如き者にて

こと

事あるい新むの神と
常に思ふ人ぞをうき

え

絵のあらまし事は国ゝに計ひよ
神の御心まの大和魂ひ

て

天運は人化に神の選びを祝
猿田彦の選び給ふ福

あ

朝夕は神を拝て身を正し
参詣して主人に見せ参らする

さ

酒と饗乱舞放蕩慎しみ
真の神の何地にやあるか

き

君は忠親は孝なり夫婦和合は神の道なり

ゆ

油断なく濁れ浮世の丸木橋
神とかはる身をおして

め

眼い天は聖み耳あふ請も
是皆神の御仕業なれ

み

皇國人神の国まと聖ふ
いよ〳〵尊く神と崇と尤

一 信心ハ身の為人と為人民
神の恵ミハ身を祭り万民

九 業報を所願ハ人まろハ恩徳を
神ハ祈りて信仰を勤よ

八 日を月も陰形屋ハ蔭でなく
隠身ハ神や守ふん

七 本を知現来ハ原ほせ人の元
神ハ人間高物のまて

七

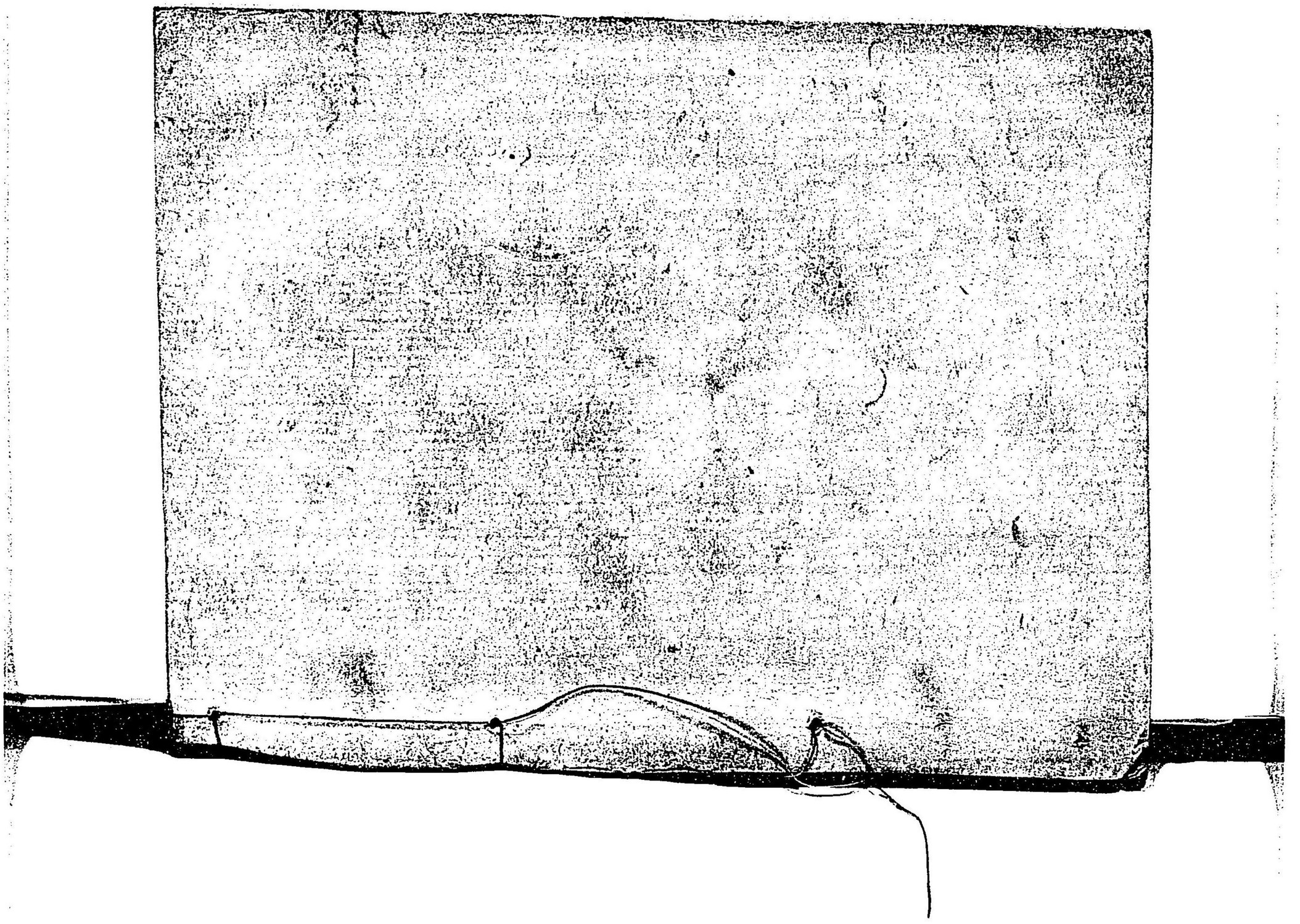
世上の誠を盡し忍耐し
むつまじくせよ神は恵む人

八

皇の神孫永遠に
踏ねいてゐる人の大道

明治十三年五月廿四日版權免許
同 十四年 九月廿六日出版 定價拾貳錢

著述人 青森縣平民 田子丹宮

同 丹宮男

出版人 田子宮太
三戸郡三戸八日町五番地